

西征雜詠（其一）[他二十首]：文苑

著者	笠間, 梧園
雑誌名	龍南會雜誌
巻	29
ページ	55-57
発行年	1894-10-01
その他の言語のタイトル	西征雜詠（其一）[他二十首]：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/4441

よふばかりある。昔のなまがしが大聲にもまさりつへし。さるほどに、夕日もこがねの峰にてうかいやきつゝ、おちゆくめる。かの山のはにげてんどねもふもかひあし、とくに歸るまぎして、さかのばれば、第一級のをしへ子ども猶をばしまに倚りて、これらのをまち顔なり。そのうちひとりふたりかちわたりきて、やよ人目をよきて通るとあ、こゝは税關のある所ぞ、あらためすばひとりもどほすまじとて、舟ひきよせたる中々れかし。舟よりのばれば、おのゝ杯もちきて、すゝつゝ飲みかはすほどに、いさよひの月も、松のぼこしに尋ねきて、さよき流の夕波にすめる。うの涼しさ、今一入のながめなりければ、こゝにてこそは、例の一番をと望む。すきのかたあれば、いさやとて杯さしつゝ、汲むや心もいさぎよき、江津の川瀬のみあかみはと、所によせて、謠ひいづれば、皆人拍子とりて、うち興することかぎりあし。さてることをたち出て、出水神社にいたりて、築山の月のけしきなとうちあがめ、三々五々聲はからかに、江津に水あゝ、出水にすゝみとによびつゝ歸るも、心ありげにてゆかし、村を出つせば、はやからうたなとうたなふ聲の、ゆくての方にはのきこゆるもありし。

賞月感時事作

教授 笠間

梧園

船渡遠江洋

雷雨過時夕霏収。吟望此夜不堪秋。想看東海一輪月。分照支那四百州。

水天相拍若無涯。扶筇唯看碧波。未信賴

翁詩膽大。纔過蒼海唱雲耶。

西征雜詠（其一）

崎陽客舍偶作

一堂只合話團欒。却向天涯踏險難。双履訪人侵積雪。訪本川某於時津某以松島炭坑自任者孤舟探鷓鴣。破狂瀾。赴

鳴者兩三回身離桑梓心常耿。候及梅花春尚寒。自慰夜來千里夢。分明膝下祝平安。

崎陽寓居雜詩

支清氏赴抑河。予在崎。松嶋事項。照會畢。而支清氏未至。予獨寓。頗苦無聊。因吟

咏自遣。遂得若干篇。但旅篋不携韻書。故冥搜暗想。每篇固有不足觀者。聊存今日

之情光。以換日錄耳。

鴻爪東西幾往還。崎陽山色又凭欄。夕陽把酒笑相對。慣見十年舊翠鬢。

平門船雜馬關船。互祝安瀾笑輾然。徹夜知他侵雨至。布帆曬運夕陽前。

蒹葭無影夕陽空。潮至鷗聲拍水中。幾個漁船齊入港。帆々分領一灣風。

雨歇夕陽虹影邊。漁歌何處破殘烟。蓬窓相對論鯨價。知是新來平戶船。

海雲如墨遠連湖。萬船掩篷晚寂寥。細雨忽成風外雪。春寒二十四長橋。

枕衾惹睡夢紛紜。燈影模糊曉色分。識得三菱船入港。一聲信砲震晨雲。

夜色闌殘燈影沈。酒醒水閣獨呻吟。青樓綺閣知何處。七十七街春雪深。長崎有七十七街。

論價喃喃語太馴。清商慧黠似天真。惘渠未解自家字。巧操邦音欲騙人。清商來實筆墨者往往有不知字者而却能解

本邦語

異邦為客歲還新。辮髮朝梳唱采蘋。爭供庶羞與清酌。春王正月祭關神。清商在崎者以其正月三日祭關公為例

路逢高麗漂流客。籃縷蓬頭成隊行。憫彼自稱般家胤。終然井底唱文明。

家々燈影萬毬連。陰曆正逢除夜天。可見舊風難俄變。三旬兩度送殘年。

肩摩行客麝香薰。思案橋頭送夕曛。仙窟人間知不遠。鳳簫吹徹半峯雲。

狂登卮畫西卮流。添予分々在手雙。手手

知堪別地離離亦長小村州

漠々海雲雜晚烟。愛看奇景落吟邊。後峯雨
是前巒雪。十里平分寒暖天。

海客宴開意氣豪。拈拳如湧響波濤。夜深人
定萬船寂。三十六灣寒月高。

攘夷頑說與煙銷。男子腰間亦廢刀。却見太
平兵備足。森嚴砲壘壓波濤。
港北大黑街有陸軍砲城

旅恨頻生眠未成。更深漁唱寂無聲。港中數
日風波惡。一夜鳧鷖近枕鳴。

昨凌風浪再乘舟。志有所期未易酬。一穗殘
燈孤枕冷。夢魂一夜落松洲。

往還刻日出京城。倏忽天涯月亦更。半夜夢
醒聞雁語。一燈殘影照鄉情。

苦熱

秋月 胤繼

早雲飛火聳晴空。矮屋煩襟恰如烘。安得沛
然雷雨作。清涼不用扇頭風。

眞然々々

文苑

潑墨雲頭橫。半空奇峯頽落畫欄東。迅雷一
擊雨懸瀑。洗盡煩炎頃刻中。

一服涼清散

納涼

蒸人午熱夜依然。吟杖尋涼到水邊。風露蕭
蕭秋滿地。中流月氣白如烟。

好絕句一唱三歎

夏日山居

摩天青幃隔人寰。幽絕何妨晝閉關。尤喜書
窓眠一覺。瀑聲洗熱水潺々。

笠間益三拜讀

夏曉

下山 陸治

ひるのまのあつさもあけに有明の

月影すゝし夏のあけかた

扇

手にあれし扇の風のあふりせは